

# 学校現場から悲鳴が聞こえる

## 第26回「コロナ禍における高校生の就職指導」

昨年よりの新型コロナウイルス感染拡大によって学校の生活は一変し、授業の在り方、行事の組み立てなど学校現場は対応に迫われましたが、高校での就職指導も通常のスケジュールで行うことができず、生徒や教員にとって厳しい就職戦線となっています。

**記者** 大変な状況下で進路指導主事をされていますが、この間における動きを教えてください。

**Gさん** 進路指導主事は2年目になります。主事を任されるとは思っていませんでしたが、他に適任者がいないということで受けることになりました。同じような先生が他校にもいますが、何が何だかわからないまま昨年は初めての任にもかかわらず、イレギュラーな進路指導を余儀なくされました。

**記者** 人がいないからというのは謙遜でしょうが、職員の年齢構成などに問題が出ているのですか。

**Gさん** 年齢構成は比較的バランスはいいと思いますが、近年大幅な人事異動が行われ、この2年で職場の半数が入れ替わりました。本校における経験年数が少ない先生ばかりになり、主事をやる人がいないというのが現状です。他校にもいると言ったのは同様の意味です。

先ほどイレギュラーと言いましたが、求人解禁(求人票受付開始日)は例年通り7月1日でした。でも、コロナ禍で昨年は3月から一斉休校になり新年度の4～5月の進路指導はできませんでした。そのために企業の採用試験開始日は、通常9月16日から一か月先の10月16日となりました。これは生徒にとっては良かったかもしれませんが、例年なら求人解禁から一か月半弱で応募先を決めなくてはなりません。つまり7月から8月の半ばには決めるわけですが、9月半ばまで考える

期間ができたのでその間に会社見学に何社か行くことが出来ました。しかし、指導する側は大変でした。昨年の1学期は7月末まで延長となり、授業をしながら会社見学の手配と指導を行いました。指導期間が長丁場になったためにスケジュールの見直しも必要となりました。進路支援業者※による指導はどのタイミングで入れるか、応募先の締め切り日はいつにするか、就職推薦会議の日程など見直しを余儀なくされました。

(※進路支援業者とは、大学、短大、専門学校や企業の情報を生徒たちに体験学習や講演会などを通して提供する民間会社)

**記者** スケジュールの見直しは勤務実態にも影響を与えたのではないですか。

**Gさん** 従来は夏休み中に推薦会議をし、9月初旬に企業への応募書類発送でしたが、昨年は授業をしながら9月上旬に推薦会議を開き、10月上旬に発送となりました。しかも、進学指導も10月から推薦入試に向けて並行して進んでいたもので忙しい毎日でした。私は8月から9月の二か月間年休は取っていません。夏季休暇も本来は5日間取れ、昨年は特例で9月まで取得できることになっていましたが、結局4日止まりでした。残業ですが、今は基本的に18時を過ぎたら退勤を促されることになっているので、家への持ち帰り仕事になりますね。

**記者** さて、求人状況はどうでしたか。

**Gさん** 昨年の本校への求人数は前年度比3割減でした。しかし、これまでの実績がある

事業所からいつも通りの求人があったので、さほど危機感を持っていませんでした。それが、前年は来ていた求人が7月末になっても見当たらないことに、ある女子生徒が気づきました。2年生の教室には前年の求人票ファイルが置かれているのですが、その女子生徒は2年次の時にアパレル業界からの求人が数件来ていたことを知っていたのです。ご存じの通り、昨年はコロナ禍でアパレル業界は大不況で、話題のユニ○○の一人勝ち状態です。この年のアパレル業は1社のみで、この生徒は「洋服の販売」を諦め、担任がいろいろ選択肢を提示した3～4社ほどの事業所へ見学に行き、接客にかかわる仕事に就きました。現在は研修期間を終え、資格も取って現場で元気に頑張っています。

一方、第1回の応募の結果は、近年で稀に見る不合格者数となりました。うち4件はこれまで本校から就職実績がある会社でした。結果が出始めた頃、不合格者数が合格者数を上回った時点もありました。最終的には、1月中旬に希望者全員が内定を得ることができました。就職も進学も全員が進路先を決めることができましたが、コロナ禍による企業業績の変化に左右されたというのが実感です。6月に企業がハローワークに求人申請から許可への手続きをし、採用試験が始まる10月半ばまでの4か月の間にコロナ禍による業績悪化などがあったのではないのでしょうか。それにしても、事前に正直に採用枠がなくなったことを伝えて欲しいものです。内定取り消しは生徒にとって大きなダメージになりますから。

**記者** 依然としてコロナの終息は見えませんが、今年の就職状況はどうなっていますか。

**Gさん** 7月1日の解禁日、昨年とは打って変わって来客の嵐となっています。翌2日も同様でした。7月9日現在、昨年1年間に本校に来た県内求人数の半数を既に超えました。一昨年は求人がある、昨年はなかった事業所が、今年再び求人を出している例がかなり多くあります。昨年度末のハローワークで開

催された市内高等学校進路指導主事会合では、今年度の求人予測は厳しいという見方が多数を占めていましたが、状況は好転しそうです。コロナ禍における世の中の状況(労働者不足、内食傾向)を反映しているのではないのでしょうか。生徒の多くはつい先日まで就職か進学かで悩んでいました。就職希望の生徒のほとんどは、「こんな仕事がしたい」ではなく、求人票を漠然と見ながら考えています。関心のある求人票があれば、コピーをもらいに来ることになっていますが、まだ数人しか来ていません。これからドツとくるのでしょうか。いつでも求人票を見られるように、今、生徒に配布されているタブレットの活用を画策中です。先ほどの女子生徒のように、何か強い希望が示されればこちらも相談に乗りやすく、選択肢も提示できますが、何ら「希望」がないと、つい手をこまねいてしまいます。「希望」をいかに引き出せるかが進路指導のカギになりそうです。

**記者** 以前は不況の時は希望の就職先が得られず、やむを得ず専門学校等への進学を決める生徒がいましたが、コロナ禍にあってはどうか。

**Gさん** 今はあまりそのような生徒はいませんね。むしろ、進学はしたいけれど、経済的理由で就職を希望する生徒が少なからずいます。それから、現在来ている職種ですが、やはりアパレル、外食系は非常に少ないです。女子はエステティシャン、ネイリスト、アパレル販売、事務職などの仕事を求めています。その求人数は限定的です。それでもないよりは良いと考え、見学先を各自絞っているところです。男子からは希望職種のことは聞こえてきません。求人票から黙々と良さそうな会社を探しています。

**記者** 具体的な事も示され、困難なかで「希望」をいかに見出すのか、進路指導で苦慮している様子が伺えました。生徒にとって「希望」が生かされた就職の実現を願わずにはいられません。